

国語科

「きく」を育む国語学習の創造

国語科研究部：清水 良，西川 義浩，福田 淳佑

1. 本校国語科の目標

- ・きく技能を活用しながら様々な対象を言葉でとらえ理解する。その際に用いられる言葉そのものも対象とする。
- ・対象とのかかわりを通して、自分の思いや考えを形成し深めながら自己を確立するとともに、他者を尊重する態度を育てる。対象とのかかわり自体に意味を見出し、楽しむ態度を育む。

本校国語部は、「きく」ことを主軸に目標を据える。私達がとらえている「きく」とは、発話された言語の理解だけではなく、自分、相手、内容・事柄、言葉（語感や概念も含む）、場（状況や沈黙も含む）、非言語情報をも対象とした子どもの学習行為である。そうとらえた時、「話すこと」「読むこと」「書くこと」といった言語行為の前には、必ず内的に対象に向き合う「きく」という行為がなされると考えられる。

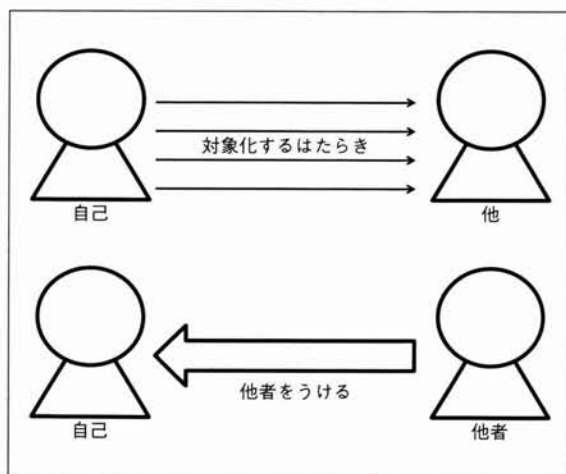
「きく」対象を多様化しても厳密な意味においては、学習者に正確な理解はありえない。なぜなら、個々人の中でのとらえにずれが生じるからである。これまでに私達はいくつかのずれの場面を見出してきた。

- ・他者が言葉で発した時に起こる他者内の思いと表現のずれ。
- ・表出された言葉をめぐっての自他の理解と意識のずれ。
- ・きき手が自己内に言葉を取り込んだ時に起こる理解のずれ。
- ・人物の評価など自他の関係性がもたらす認識のずれ。
- ・話の文脈（進行）のとらえの差がもたらす解釈のずれ。

・場の状況からのずれ。

これらのずれこそが、「きく」行為において自己内に理解と思考を生み出していく。

多様な対象の認識とずれによる理解と思考の過程を経て、それらがさらに織りなすものは、対象とのずれでは図り得ない、わかりえぬ他者から揺さぶられることを潔しとする謙虚な自分と、わかりえぬ他者とは切り離された、今ここにいる私を潔しとする揺るがない核となる自分である。



よって「きく」姿勢をもつということは、多様化した対象に対して能動的に迫っていく姿勢と、それでもわかりえぬものを受け止める受容的な姿勢を併せもつ姿となる。それは「きく」という行為が自らの人間形成を育むとともに、他者を尊重して共生していくことを生み出すと考える。「きく」ことによるこの一連の過程を「おもしろい」と思うようになった時、初めて「きく」行為を有益に感じる言語生活者となる。

2. 目指す子ども像

- ・「揺るがない核となる自分と揺さぶられる謙虚な自分」を包括する子ども
- ・「きく」ことが「楽しみ」や「快さ」である子ども

3. 育てたい力

「きく」力…「きく」力を3つの資質・能力に分類し、それがはたらく意識を6つに分類する。

(1) 3つの資質・能力

- ・構え・姿勢 …… 従来からの聞く態度に加え、「ききたい」という自己欲求や「きく」度量、「きいた」ことによる自己効力感などを示している。
- ・知識・技能 …… 「きく」対象の理解、「きき」方の理解と活用を示している。
- ・思考・判断・表現 …… 知識・技能を活用した上で、発揮される自己内で行われる部分の資質・能力を示している。

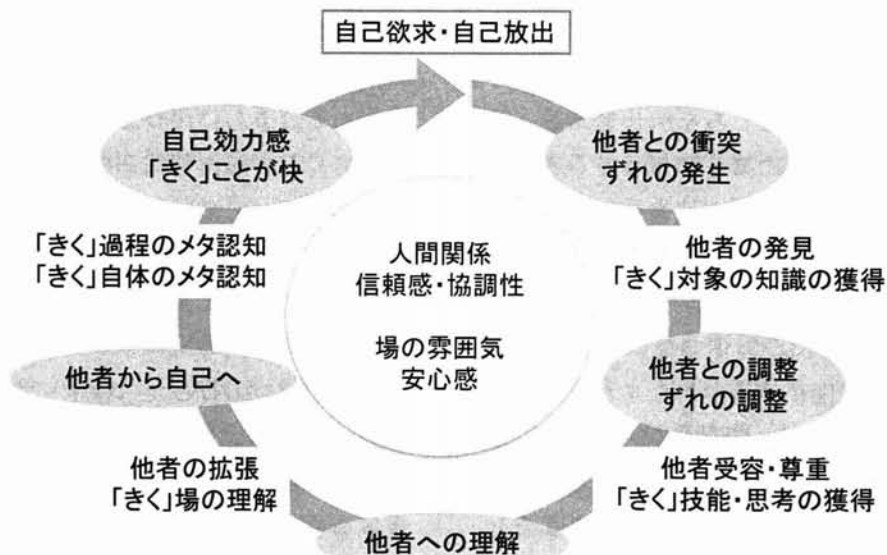
(2) 6つの対象となる意識

- ・対自分意識
- ・対人意識
- ・対場意識
- ・対内容・事柄意識
- ・対言葉意識
- ・対非言葉意識

4. 「きく」を育む発達段階モデル

「きく」を育む過程として、以下のモデルを提案する。これは、学年や時期、学級の実態を考慮した上で、重点をかける部分は異なる。年間を通して、または単元を通して進めていくための指針となるモデルである。単元をつくっていく時、子どもの「きいている」状態をとらえる時にモデルと照らし合わせ、その子どもに必要なねらいを定める時に有効であると考えている。「きく」という現象がみえにくいものであるからこそ、みようとする一つのモデルとなる。それにより、これまで経験則的にみとっていたことも、意識的に指導できるようになる。

「きく」を育む発達段階モデル



- ・学年や時期、学級の実態を考慮した上で、重点をかける部分は異なる。
- ・年間を通して、または単元を通して進めていくための指針となるモデルである。

東京学芸大学附属世田谷小学校 国語部 2016 ver.1